

年	出来事、市場投入製品	製品概要			備考
		最大通紙サイズ (+はノビサイズ)	A4換算コピー速度 または印字速度	価格	
1938	C.F.Carlson : Electrophotography発明				電子写真・間接乾式技術基本発明。翌年Xerograpy特許出願
1951	RCA社: Electrofax (EF方式) 発明				電子写真・直接乾式基本技術(感化型鉛感光体を用いるElectrofax-EF)。1951年USP出願→放棄。1953年出願→1962年USP登録
1951	丸島精化工業: 車上型速式ジアソ復写機「M型」発売				世界初の車上型速式ジアソ復写機 ('現キヤノンファインテックニスカ株式会社')
1953	理研光学工業: ジアソ復写機用 日本初素紙色(ブルー)系感光紙、現像剤「ND感光紙」、「ND現像剤」発売				日本初素紙色(ブルー)系感光紙、濃淡現像剤 アンモニアガス・水洗が不使用となる ('現リコー')
1955	理研光学工業: 事務用超小型ジアソ復写機「リコピ-101」発売	B4紙	5cpm	¥138千	日本初の「露光・現像・一体型」複写機
1956	三田工業: 車上ジアソ復写機「コピスターA4J」発売	A3紙	35~250mm/hour		A3復写対応。500W交流二重電球式白熱水銀灯、ジアソ復写機がオフィスで広く用いられる ('現京セラドキュメントソリューションズ')
1957	富士ゼロックス: XEROX1365(手操作復写機:スタンダード・ゼロックス)国内発売	B4紙	0.33~0.2cpm		オセット印刷マスター、ジアソリー第一原版作成、アーメーションフィルム、プリント板、OHPフィルム作成。50%~150%の縮小拡大可
1958	電子写真会 弗足				電子写真および電子写真に付する新規像技術開発。人材育成を主軸。1958年日本顕微学会に名前変更
1959	Xerox: Xerograpy技術を使った世界初普通紙復写機「914」発売	9"x14"紙	7cpm		Xerograpy技術を使った世界初普通紙復写機発売。φ238 Se系感光体ドラム、オープンカスクード現像、オープン定着
1960	理研光学工業: EF方式マイクロフィルムリーダー「リコーカスクM4」発売				日本初期のEF方式を利用したマイクロフィルムリーダー
1960	理研光学工業: EF方式マイクロフィルムリーダープリンタ「リコーカスクP4」発売				乾燥現像に、世界で初めて露光プラシーラを採用
1962	桂川電機: 普通紙復写機向け「EF電子写真方法」開発、発表				Xerox特許を回避した電子写真方式。後に発表されたキヤノンNPプロセスと同一原理
1963	富士ゼロックス: 「国内普通紙復写機「914」」発売	B4紙	7cpm	レンタル月額¥35千	国内向けに仕様変更設計し生産。国内生産普通紙復写機登場 ('現富士フィルムビジネスイノベーション')
1964	Xerox: 400cpmの高速普通紙復写機「2400」発売	A4紙→B4紙	40cpm		シリンドリカル原稿プラン、オーブン・カスクード現像。φ238 Se系感光体ドラム熱ロール定着以降Xerograpyの高速化が進む
1965	リコー: EF方式車上復写機「BS-1」発売	B4紙	2cpm相当	¥298千	ブリックも複数つき。低価格化。ジアソ復写機に代わり事務機としての位置づけを固める。液体現像を採用
	キヤノン: 同社初の電子写真。EF方式キャノンファックス1000発売	B4紙	6cpm	¥600千	キヤノン初の電子写真方式複写機
1967	リコー: EF方式復写機「BS-2」発売	B4紙	10cpm		ロード紙による給紙を自動化。US安全規格をクリアし、国際機の海外進出の先駆けとなる。国際プロジェクトでの開発(Savin,A.B.Dick,Nashua)
1968	同社: 直接in-Color方式による世界初のカラー複写機発表				同社独自方式による世界初のカラー複写機。翌年「カラーリンカーラー」発売開始
	キヤノン: Xerox特許を回避して普通紙複写技術「NPシステム」開発、発表				Xerox特許を回避した。同社独自の電子写真方式NPプロセス、ブラシ手現像での発表
1970	Xerox: 普通紙復写機「4000」発売	B4紙	40cpm		全面対向電極付きカスクード現像。φ238 高感度Se系ドラム、熱ロール定着、ブレードクリーニング、自動トナーオーバーディケート(ADC)搭載複写機の自動化が進む
	キヤノン: 日本初の普通紙復写機「NP1100」発売	B4紙	10cpm	880千	CdS感光体NP方式。乾式現像。ブレードクリーニング採用。日本初の普通紙復写機
	IBM: 同社が複写機市場に参入。普通紙復写機「I型」発売		10cpm		IBMが複写機に入門。IBMのOPC感光体搭載
1971	コニカ: 「普通紙複写機「U-Bix480」」発売	B4紙	8cpm		感化型鉛マスター感光体を用いた日本初の普通紙復写機。乾式現像 ('現コニカミノルタ')
	富士ゼロックス: 普通紙復写機「3600」発売		60cpm		シリンドリカル原稿プラン、熱ロール定着。Xerox社開発。高速機
1972	キヤノン: NP方式を採用した普通紙複写機「NP-L7」発売	A3紙	30cpm	¥688千	普通紙複写機として世界で初めて液体現像を採用
	シャープ: EF方式複写機「SF201」発売	A4紙	10cpm	¥335千	液体現像。国内電機メーカーとして複写機事業に初の参入
	リコー: 普通紙複写機「TPC900」発売	B4紙	15cpm	¥888千円	Se感光体。乾式磁気プラズマ現像採用
1973	Xerox: 世界初の普通紙カラーレプリカ「6500」発売	リーガル紙	3.2cpm	¥0.3/枚	世界初のXerograpy「普通紙カラーレプリカ」カラーコピーサービス単価¥300/枚
	富士ゼロックス: 同社初の独自開発普通紙複写機「2200」発売	B4紙	5cpm→10cpm		富士ゼロックス社初の国内販売。φ21mmSe系感光体ドラム、オープン定着、バドルカスクード現像。ウェブ式クリーニング、世界最小デスクトップ機
1974	日立: EF方式カラーレプリカ発売	B4紙	0.66cpm	¥2,880千	国産初の電子写真方式カラーレプリカ。酸化亜鉛紙、液体現像
	キヤノン: 普通紙カラーレプリカ「NPカラー」発表	A3紙	5cpm/半單15cpm	—	NP方式。CdSドラム。改良を重ね1978年に乾式機を完成。国産初のカラー機となる
1974	Xerox: 高速普通紙複写機「9200」発売	A4紙	120cpm	\$50000<	Seペルト感光体。フラッシュ露光。4段磁気ブリズン現像。120cpm最高速度。大量コピー機の先駆けとなる
	シャープ: 普通紙複写機「SF710」発売	B4紙	8cpm		同社初の普通紙複写機。IC制御回路採用
	ミノルタ: 普通紙複写方式複写機「EG101」発売	A4紙	10cpm		静電記録紙。潜像転写(TES)方式。液体現像採用 ('現コニカミノルタ')
1975	リコー: デスクトップ普通紙複写機「DT1200」発売	B4紙	20cpm	¥750千	液体現像を用いたデスクトップ普通紙複写機。輸出。OEMにて世界に広がる商品となる
	IBM: 世界初のコンピュータ-端末連接紙レーザービームプリンタ「LBP」「3800」発表		10020 or 20040 l/min		電子写真方式統紙レーザービームプリンタ。同社が端末プリンタとして電子写真技術に注力 (144x180dpi) 書込み
	Eastman Kodak: 高速複写機市場に参入。「Ektaprint100/150」発売		70cpm		同社初の電子写真複写機。性能と同時に、高画質を狙う。搭載セキセキカラーリソーチャンネル現像
	富士ゼロックス: フィルム一握複写機「富士ゼロックス6500」国内販売	リーガル紙	3.2cpm	¥0.3/枚	Xerox開発。国内業界で初めてのフルカラー電子写真複写機。コピーサービス単価¥300/枚
	キヤノン: LBPの開発に成功。「LBP-3500」製品化				NP方式レーザービームプリンタ。He-Neガスレーザー使用。メインフレーム出力機を狙う
1976	IBM: 高速普通紙複写機「III型」発売	legal	75cpm	¥25,000	導電性樹脂層構造成形OPCドラム。スキャン光学系の最高速 (70cpm)。1986年まで改良種機を開発する
	三田工業: EF方式複写機「ビビスター900-D」発売	A3紙	12cpm	¥498千	導電性磁性トナー成形現象。酸化亜鉛紙。压力定着採用 ('現京セラドキュメントソリューションズ')
	シャープ: 普通紙複写機「SF710L」発売	B4紙			世界初制御用Si塔載
	リコー: 静電潜像転写方式フルカラー複写機「CR1000」発売				OPC。感光性付与静電記録紙に潜像転写。液体現像採用
1977	日本電気: 電子写真方式カラーレプリカ「N7380」発売		21000 l/min		国産初の電子写真方式ペーパーリンタ (144x180dpi)
	日立: 電子写真方式カラーレプリカ「H-8191/8195」発売	B4紙	12ppm		液体現像採用 (289dpi)
1978	キヤノン: 普通紙密度最高複写機「NP8500」発売	B4紙	77cpm	¥5,000千	スクリーン感光体による。NPリテレーション方式採用。乾式2成分磁気ブリズン現像。最高速を狙う
	コニカ: 「普通紙複写機「U-BixV」」発売	A3紙	15cpm	¥760千	同社初Se感光体。現像能力検知フォトセンサー採用。市場でのサービス・メンテナンス性を記述した ('現コニカミノルタ')
1978	日立: 同社初の高感度高速複写機「H-8192/8196-20」発売		7000 l/min		翌年には比肩する高感度となる高感度漢字プリント「H-8192/8196-30」発売開始。240dpi
	富士ゼロックス: 普通紙複写機「富士ゼロックス3500」発売	B4紙	40cpm		高耐久As2Se3系感光体採用001VAで40cpm。安定性が優れ顧客の中へ高速PPCのスタンダードとなる
	富士ゼロックス: 大型面用複写機「富士ゼロックス2080」発売	A1紙			A1サイズまでコピーできる大型面用普通紙複写機
1979	キヤノン: デスクトップ普通紙複写機「NP200」発売	A3紙	20cpm	¥598千	織性非接触1成分現象(ジャッピング現象)搭載。同社のモノクロ現像方式のベースとなる
	キヤノン: 上卓型レーザープリンタ「LB-10」発売	A4紙	10ppm	¥1,950千	世界初の卓卓上卓レーザー搭載。反転式液体現像。世界最小・最低価格。オフィスLBの先駆け
	ミノルタ: デスクトップ普通紙複写機「EP310」発売	B4紙	12cpm	540千	小粒径キャリア成分「マイクロトーニング現像」採用。高耐久が評判となる ('現コニカミノルタ')
1980	富士ゼロックス: 普通紙複写機「富士ゼロックス4800」発売	A3紙	40cpm	¥1,880千	「3500」機の高速化型。自動両面機能搭載
	富士通: 同社初。コンピュータ端末用日本語ラインプリンタ「FACOM6715D」発売		20000/min		富士通初電子写真方式ラインプリンタ。第七回情報処理技術遺産に認定
1981	リコー: 普通紙複写機「FT7500」発売。(60cpm)	B4紙	60cpm	¥4,550千	新開発高感度高感度OPC搭載。国内のOPC開発がayanになる
	キヤノン: 普通紙複写機「NP8500Super」発売	B4紙	135cpm	¥9,850千	NPリテレーション方式。当時のXEROX超高速機を超える世界最高速となる
1982	富士通: 同ビューポン端末用日本語ラインプリンタ「FACOM6700D」発売		14100 l/min		高速日本語ラインプリンタ
	リコー: デスクトップ普通紙複写機「FT4060」発売	A3紙	21cpm	¥798千	高感度。高耐久As2Se3系感光体採用。2成分現像小型高速PPCのスタンダードとなり。同一エンジンでの機種展開が進む
	リコー: 世界初の商用デジタル普通紙複写機「RICORE3000」発売	A3紙	30cpm	¥9,900千	世界初デジタル複写機 CDD-Rメジストリーナー、He-Neレーザー、高耐久Se系感光体。2成分反転現像採用 (300dpi)
	キヤノン: パーソナル普通紙複写機「PC10/20」発売	A4紙	<PC20> 8cpm	<PC20> ¥298千	世界初のユーザー交換カセットリタッジ (感光体、帶電、現像、クーリング) 方式採用
	キヤノン: 普通紙高速複写機「U-Bix4500」発売	A3紙	45cpm		高感度。高耐久As2Se3系感光体採用。コニカ高速機の先駆け
1983	ミノルタ: 世界初ズーム複写機複写機「EP450Z」	A3紙	25cpm	¥848千	世界初ズーム複写機 複写機が同社の主力事業になってくる。等倍専用機 EP 450も¥648千で同時発売
	キヤノン: フィルム一握複写機「NP9030」発売	A3紙		¥8,950千	NP方式。乾式現像。OHPフィルム専用
	リコー: 普通紙複写機「FT6090」発売	A3紙	46cpm	¥2,280千	高感度。高耐久As2Se3系感光体採用。高感度PPCの足がかりとなる
1984	リコー: パーソナル普通紙複写機「M10/M5」発売。	B4紙	<M10> 8cpm	<M10> ¥298千	世界初7.5mm小径トナー採用。1成分FEED DR現像搭載
	キヤノン: パーソナル普通紙複写機「PC10/20」発売	A3紙	30cpm	¥1,980千	As-SI(非晶質シリコン)感光体採用。アシジタル画像処理により高画質化が進む
	キヤノン: 小型レーザープリンタ「LB-8A/CX」発売	A4紙	8ppm		ユーザー交換・一体型カセットリタッジ方式採用。世界最小・最軽量。価格を40万台に抑え。パーソン用電子写真プリンタの先駆け
	キヤノン: フロアタイプ高速普通紙複写機「NP7550」発売	A3紙	50cpm		e-Si感光体。1成分ジオジン現像。高感度耐久化が進む
	シャープ: パーソナルユース普通紙複写機「Z60」発売	B4紙	6cpm		パーソナルユース。世界最小B4機。ユーザー交換現像ユニット
1985	富士ゼロックス: フルカラー複写機「富士ゼロックス6800」発売	A3紙	5cpm(カラー)	¥5,800千	フルカラー複写機第二弾
	東芝: 普通紙複写機「Jオドライ4121」発売		14cpm		「サンカラ」、スヌース搭載。この複数機への差別化機能。付加価値競争が進む ('現東芝テックに事業移管)
	リコー: 同社初のフルカラー普通紙複写機「RC5000極楽鳥」発売	A3紙	カラーフ-5/単色8.3cpm	¥6,800千	リコー初フルカラー普通紙複写機
	シャープ: 同社初の高速複写機「SF9500」発売	A3紙	50cpm		シャープ初高速機。6cpmから50cpmまでのラインアップが完成
1986	キヤノン: 同社パーソナル普通紙複写機第二弾「FC3/FC5」発売	A4紙	<FC3> 6cpm	<FC3> ¥99千	カートリッジをさらに小型化・価格格化を達成。単色カラーカートリッジ有り
	コニカ: 高速普通紙複写機「U-Bix 5500」発売	A2紙	55cpm	¥2,525千	高速フルシステム機。両面原稿の連続自動面間機。A2面紙は1984年発売U-Bix5000より